

18 世紀フランスの舞台実践と演劇美学の変容——演劇と絵画の関係性を中心に

今回の在外研究では、18 世紀フランス演劇に関する研究を進めるため、ソルボンヌ大学 ルノー・ブレット＝ヴィトーズ教授（18 世紀フランス演劇を専門とする）の受け入れで招聘研究員としていただき、2025 年 4 月から 2026 年 3 月までパリに滞在した。在外研究期間中はソルボンヌ大学のセミナーや研究会に参加しながら、フランス国立図書館（BnF）とコメディ＝フランセーズ劇場付属図書室（資料室）に通い、研究を進めた。研究課題に関しては、当初は主として 18 世紀フランスの舞台実践と演劇美学の変容について、同時代の演劇と絵画の関係性に注目して研究を進める予定でいたが、上記の図書館や資料室での調査・研究を進める中で、18 世紀フランス演劇（とくにマリヴォーとボーマルシェ）の現代演出に関する資料が多く存在し、また、これまで研究が進められていないものも多くあることが判明した。18 世紀フランス演劇の現代演出（20 世紀以降の上演）も以前から自身の研究課題の一つであったため、現地での資料調査が不可欠な現代演出（とくに 20 世紀前半）の調査・研究も在外研究期間中に併せて進めた。

まず、18 世紀フランスの舞台実践と演劇美学に関して、演劇と絵画の関係という観点から、ソルボンヌ大学のセミナーや研究会に参加して知見を深めながら、図書館にて調査・研究を進めた。18 世紀フランスの演劇界では、劇場や舞台装置が発展することもあり、新たな視覚性、我々（観客）を取り巻く世界の「より自然な」再現＝表象へと関心が向けられ、ヴォルテールやディドロなどの啓蒙思想家も演劇や舞台の改革に取り組む。その際、絵画は重要な参照項であり、例えばディドロは「舞台とは一幅のタブローであるように」

（『「私生児」との対話』、1757 年）と構想し、演劇における「タブロー」概念を示した。また、ディドロ等の市民劇の影響を受けたボーマルシェは、このタブロー概念にも関心を抱き、『フィガロの結婚』（1784 年初演）等、自作において独自にタブロー場面を発展させている。さらに、ヴォルテールなどの舞台改革を経て革命期には、俳優タルマと画家ダヴィッドが実際に協働作業によって衣装や装置の改革を行っている。このように、18 世紀から 19 世紀初頭のフランスでは、理論・実践、双方において演劇と絵画が深く関わり合い、舞台改革や演劇美学の発展において重要な役割を果たしている。この関係とその重要性に目を向け、実際にいかに関わり合っていたのか、タルマとダヴィッドの実践、ボーマルシェの作品を中心に、フランス国立図書館等で調査・研究を進めた。また、在外研究期間中、ルーヴル美術館にてダヴィッド展、プチ・パレにて 18 世紀の画家グルーズ展が開催され、絵画に関する知見を深めることもできた。研究成果は、2026 年度に刊行予定の『演劇の事典』（丸善出版）の 18 世紀演劇および革命期の演劇に関する項目執筆に反映させるとともに、2026 年 5 月に刊行された共著に収録された論文 “Theatrical Tableau as a New Horizon of Visual images: A Study of Beaumarchais’s *The Marriage of Figaro*” にて公表した（François Giraud, Marion Schmid (eds.), *Thinking Intermediality: Identity, Ethics and Aesthetics*, Oxford, Peter Lang, 2026 年 5 月）。また、マリヴォーの演劇に関しては、「俳優の演技」の観点から発表する機会があり、滞在中に国際シンポジウム *Marivaux à l’épreuve de la scène contemporaine : quel jeu d’acteur pour le théâtre de Marivaux ?* に参加して発表を行った（Kaori Oku, « La dramaturgie de Marivaux et le jeu “naturel” : représenter le soi ambigu sur la scène »,

2025 年 7 月 1 日、ポルトガル、リスボン大学)。この内容をもとに加筆・修正した論考は、他の発表者の論考とともに 2027 年度に書籍化される予定である（原稿を提出済）。

18 世紀演劇の絵画性と現代演出の両方に関わるテーマとして、コメディ＝フランセーズのレパートリーの継承（上演と演出面から）についての調査も進めた。上記のように、ボーマルシェ『フィガロの結婚』については絵画性の視点からの研究も進めたが、他方で、この作品がコメディ＝フランセーズにおいて 19 世紀以降、20 世紀初頭まで、演出や配役、演技の観点からどのように継承されてきたのか、レパートリー継承と受容の観点からも調査・研究を進めた。これは調査対象が広範であるため、今回は登場人物シェリュバン（設定は少年の小姓だが中性的で、作中では異性装もあり、また台詞だけでなく歌唱場面もある興味深い存在で、初演以来、長らく女優が演じてきた）に注目した。調査は主としてコメディ＝フランセーズの資料室で行い、初演から 20 世紀までの配役が記された上演記録を調べて上演史を明らかにしたうえで、同時代の劇評を広く調査して読み解き、シェリュバンの配役や演技方に関する議論がいかなるものであったのかを明らかにした。また、上演史において、どの時点で男優が演じるのか、あるいは少年（子ども）が演じるのか、などにも注目して調査を進め、その重要な転換点（1939 年、シャルル・デュラン演出）には映画の興隆も深く関わっていることが明らかになってきた。研究成果は、日仏演劇協会の研究会（オンライン開催）にて口頭発表のかたちで公表した（「ボーマルシェ『フィガロの結婚』のシェリュバンはいかに演じられてきたか——コメディ＝フランセーズの上演と劇評にみる伝統と革新（初演から 1930 年代まで）」、2026 年 1 月 27 日）。また、『フィガロの結婚』の上演の系譜については、以前から関心を寄せて進めていた研究でもあるため、19 世紀のシェリュバンの配役や上演の特徴については在外研究期間以前にも口頭で報告を行っており、これら二つの報告内容をフランス語の論考にまとめたものが（提出済）、2027 年に他の研究者の論考とともに書籍化され、公表される見込みである。なお、デュランの演出の意義、またこの時代（1930 年代）の演劇と映画の関わりについては、これからさらなる調査・検討が必要となる課題であり、今後もこの視点での研究を進めていく予定である。

コメディ＝フランセーズのレパートリー継承（古典の現代上演）の研究課題に関しては、マリヴォー劇についても同様に調査・研究を進めた。マリヴォーの現代演出に関しては、ジャン・ヴィラルやパトリス・シェローなど、著名な演出家による上演・演出が多く、20 世紀中葉から後半に活躍した演出家の上演はよく知られており、また研究対象となってきたが、20 世紀前半、とくに 20 世紀初頭や両大戦間、第二次世界大戦以前の上演状況や演出の傾向については十分な研究がなされていない。そこで、20 世紀前半の実態について、コメディ＝フランセーズにおける作品（上演として）の継承だけでなく、調査の範囲を同時代の他の劇場や演劇人の試みへと広げ（今回は、とくにグザヴィエ・ド・クールヴィルの活動を中心に調査を進めた）、国立図書館（BnF）とコメディ＝フランセーズ資料室にて調査・研究を進めた。調査内容の一部をソルボンヌ大学の研究会にて発表するとともに（Kaori Oku, « La « redécouverte » de Marivaux sur la scène française de la première moitié du XX^e siècle : mises en scène et réception du public autour de *La Double Inconstance* », 2026 年 3 月 19 日、ソルボンヌ大学、アスコリ図書館）、日本演劇学会のパネル「フランス演劇と古典作品——20 世紀の上演を再考する」にて、短い現状報告ではあるものの、調査報告を行った。この課題

は現在進行形であり、今後さらに調査・研究を進め、論考としてまとめる予定である。

上記の研究活動・研究成果のほかに、在外研究期間中に、モンペリエ大学にて日本のフランス演劇受容、アヴィニョン大学にて日仏演劇交流に関する講演を行う機会を得た。前者はフランス国立科学研究センター（CNRS）研究員（演劇学）シャルリーヌ・グランジェ氏からの依頼で、CNRS とモンペリエ大学の共同研究ユニットの研究会にて講演を行った。異文化圏にてフランス演劇はいかに受容され、またどのように上演可能か、という観点から日本のマリヴォー受容、演出、翻案を取り上げて論じた（Kaori Oku, « Transmettre le théâtre français dans un autre contexte culturel : Réception, mise en scène et adaptation de Marivaux sur la scène japonaise », 2026 年 2 月 12 日）。また後者はアヴィニョン大学演劇学教授パオラ・ランツィーニ氏からの依頼で、演劇人ジャン＝ルイ・バローをめぐる日仏演劇交流、とくに日本公演とその受容に関する講演を行った（Kaori Oku, « Jean-Louis Barrault et le Japon : échanges culturels et influence du théâtre japonais », 2026 年 3 月 5 日）。いずれも、自身がこれまでに行ってきた研究の延長にあるテーマでの講演依頼であり、新たな調査や視点を加えて掘り下げ、より広い視野で考察する機会となった。

以上のように、今回の在外研究では、18 世紀演劇を同時代の文脈において、とくに演劇と絵画の関係に注目して影響関係と美学の変容を明らかにする研究、また 18 世紀フランスの演劇作品（とくにマリヴォーとボーマルシェの作品）が、初演以降、上演・演出の観点からどのように継承されてきたのかを明らかにする上演史・演出史研究、この二つの研究課題を具体的な調査とともに進めることができた。前者に関しては、今後、より具体的に絵画と演劇の関わりを明らかにしていくために、舞台装置家（画家）が実際にどのように関わっていたのかを調査するとともに、同時代の演劇と絵画の双方に登場するモチーフや形象に注目して両者の相関を検討しながら研究を進める予定である。後者の課題に関しては、20 世紀前半の演劇人の活動と交流に注目して、引き続きマリヴォー上演を中心に調査を進め、実態の解明に努めたいと考えている。分析対象の資料は主にフランス国立図書館とコメディ＝フランセーズ劇場附属図書室にあるため、大学の長期休暇期間などを利用して資料調査を行い、研究を進める予定である。

今回の調査・研究、またセミナーや研究会への参加で得た知見は、内容・視点など多方面で教育に生かすことができ、教育への効果が見込めるものであると実感している。授業や研究指導では、同時代の文脈での戯曲分析や演劇史の考察、現代演出の分析等をしながら多岐にわたるテーマを扱っており、内容・テーマによって研究方法も一様ではない。今回の在外研究により、研究内容・視点、研究方法のいずれにおいても、広がりと深さを得ることができ、教育への効果が多分に期待できると考えている。

最後に、貴重な機会をいただき、多くの方々にお世話になりましたこと、心より御礼申し上げます。